

ゆるふーVI

まなキキ・オンライン講読会

『主体の解釈学』第八講

一九八二年二月三日②「聴衆からの質問」他

2025年8月5日

Mせんせい

■ 聴衆からの質問

- ① フーコーがいう、語られたことが、真実ではない、ということについて、ラカン¹に由来する概念と関連するの？(語られることと語られぬことが、無意識に関連しているの？的な質問なの？??)
 - ゲームとしての真理という問題系が、この種の言説(ラカンのだったり、ニーチェのだったり…?)に行きつく。
 - 主体や真理、真理の主体、真実を語る主体などの問題を問うたひとは限られていて、フーコーのみるかぎり、ハイデガー²とラカンがいる。(フーコーはハイデガーを起点に考えてきた)???
 -
- ② 自己への配慮とデカルト的なモデルの競合関係について
 - カタルシス的なもの:真理への関係の問題の観点から考えられる
 - プラトン以降、提起され続けてきた問題:「どのような対価を払えば私は真理に到達できるだろうか」
 - ・ 主体はそのものとしては、自らに与えられているそのままの姿では真理を受け入れる能力がない。
 - ・ 主体は、真理を受け入れることができるようにしてくれるいくつかの操作、変容、修正を自分自身に対して行うことではじめて、真理を受け入れることができるようになる。
 - 唯一真理への到達を可能にしてくれる回心=立ち返りといった考え方は、キリスト教だけではなく、あらゆる古代哲学にみられる
 - ある時点で主体がそのものとして、真理を受け入れることができるようになった。(デカルトを目印に)
 - ・ 科学的実践のモデルの作用がかなりあったはず
 - 眼を開いて、明証性の糸を常に辿りつつこれをけって手放さずに、健全に、真っ直ぐに考えさえすれば真理を受け入れることができる。
 - 主体が主体でありさえすれば、認識において、真理に到達する道が得られる。その道は、主体という固有の構造によって開かれている。(デカルト)

¹ フランスの精神分析家。パリーフロイト派の総帥。鏡像段階(生後6~18カ月の幼児が、鏡に映った自己の身体の統一イメージを獲得していく過程。自我の成り立ちを説明するためにラカンが定式化した概念)、無意識の言語的構造、想像界・象徴界・現実界など独創的な理論を構想して、哲学・人類学・文学の分野にも影響を与えた。著『エクリ』など。(1901-1981)

² ドイツの哲学者。フッサールの助手を経てフライブルク大学教授、総長。新カント学派・現象学・解釈学や生の哲学などを統合し、実存哲学・現象学的解釈学・基礎的存在論などに新たな地平を拓いた。人間存在(現存在)の根本的あり方を世界的内在としてとらえ、その本質構造に関心すなわち時間性として実存論的に分析した。後期では、存在は、自己矛盾的構造のもとに決して姿を見せぬ根拠として思索された。主著『存在と時間』『哲学への寄与』『ニーチェ』。(1889-1976)

- 我々が知ることでできないものがまさに、認識する主体の構造そのものをなしている。この構造こそが、我々がそれを知りえないようにしている。(カント)
- 真理への到達のための霊性という条件は一掃される

③ 主体の変容を経て到達する「真理」と、主体がおのずから到達する「真理」は同一のものか？

- 決して同一のものではない。
- ・ 前者は、真理に到達した存在そのものが同時に、そしてその反作用として、それに到達した者の変容の動因となるような、そうした到達である：新プラトン主義的な循環。
 - 私自身を知ること、私は真理なる存在に到達する。そしてこの存在の真理が、私という存在を変容させ、神に同化する
- ・ 後者(デカルト的なタイプの認識)は、さまざまな対象の領域の認識。
 - 対象の認識という概念が、真理への到達という概念に置き換わってしまう：この「変容」こそを、「哲学と霊性」という軸にしたがって研究したいとフーコーが考えているもの

■ 自己への配慮と他者たちへの配慮。関係の逆転 (P225, L15-)

- ・ プラトンにおいて、都市の救済のほうが個人の救済を、その帰結として包含していた
 - ひとが自己へ配慮するのは、他者たちの面倒を見る必要があるからであった
 - ひととは他者たちを救うとき、同時に自己自身を救うことになった

関係の逆転

- ・ ひととは、自己であるがゆえに、そして自己のために、自己へ配慮しなくてはならない
 - 他者たちの利益、他者たちの救済、他者たちへ配慮するその仕方…は、付随的な利得として現れるように
- 3つの事例から考える
 - (ア) エピクロス派の友愛の捉え方
 - (イ) ストア派の、エピクテトスによる自己と他者たちとの関係(自己への義務、市民に対する義務)
 - (ウ) マルクス・アウレリウスにおける支配力の行使の問題

■ エピクロス派の友愛の捉え方 (P226, L15-)

- ・ エピクロスは、つねに友愛を有用性から派生させていた。
- 有用性への配慮であるような自己への配慮によって、完全に支配されていたのだろうか？

ヴァチカンの格言

「あらゆる友愛は、それ自体で望ましいものだ。ところが、友愛はその始まりを、有用性から得ている」

- 友愛の有用性と、それからそれに内在する望ましさの間には、相互排除の関係があるようである。(しかし、有用性は友愛の始まりである)
- ・ 有用性：ひとが成すこととその理由との間にある、外的な関係を指している。
 - 友愛は人々を結び付けている社会的な交換と奉仕の制度のなかに書き込まれている
 - しかし、友愛は、それ自体のために選ばれなくてはならない

ヴァチカンの格言

「たえず援助を求めている人が友人なのでもなく、援助と友愛とを決して結び付けない人が友人なのでもない。なぜなら、前者は、親切に対価物を売るのであり、後者は、未来についてのよい希望を断ち切っているからである。」

➤ エピクロス派の友愛

- ① 有用性のなかで生まれる
- ② 有用性と友愛の望ましさととの間の対立
- ③ この対立にもかかわらず、友愛は、ある種の有用な関係を恒常的に維持してはじめて望ましいものとなる

ヴァチカンの格言

「われわれが必要とするのは、友人からの援助そのことではなくて、むしろ、援助についての信なのである。」

- 友愛が望ましいのは、それが至福=苦痛からの独立の一部となっているから
 - 私たちが友人から、現実の助けというよりはむしろ、こうした助けを得ることができるという確信と信頼を受け取っている
- ひとが友愛において求めるのは自己自身であり、あるいは自分自身の幸福であるとする徹底した態度
- 友愛とは自己への配慮に与えられる形式の一つである
 - ・ 私たちが友愛から引き出す有用性、ということは私たちの友人が、私たちが彼らに示す友愛から引き出す有用性も含む
 - 有用性は、自己自身のために行われる友愛の追求の内部での、一つの余剰
- プラトニックな相互性の逆転した姿
- エピクロス派の友愛は、自己への配慮の内部にとどまる;友愛の必然的な相互性を含意

■ 共同体的存在としての人間というストア派の考え方 (P229, L22-)(エピクテトスの例)

- ・ 自己への配慮と他者たちの結びつきは二つの水準で展開される
- (1)自然的な水準:摂理による結びつき
 - あらゆる生き物は、自分自身の利益を求めるといふふうにして成り立っている
 - 生物のひとつが自分自身の利益を求めるときごとに、同時に、まさにそれによって、そうしたいとか、そうしようと思うこともなく、他の者どもの利益をなすようにしている
- (2)反省的な水準:理性的存在(人間)が問題になるとき
 - 人間は、自分自身に委ねられており、自分自身に配慮しなくてはならない
 - 人間は、自分を配慮の対象とすることによって、人間は自分が何であるか、自分であるものが何なのか、自分でないものが何なのかを問うことになる。
 - 自分の権内にあるものが何か、自分の権内にないものが何かを実際に正しく分析し—なすべきこととなすべきでないことが分かるように自分自身に気を配っている者は、彼が人間共同体に属している限りにおいて持っている義務を果たす術も心得ているだろう。
- ✓ 娘の看病から逃げ出してしまった父親の例
理性的個人として自分を考慮に入れられていなかった故とエピクテトスは批判

■ <君主>の誤った捉え方 (P233, L12-)

- ・ “君主”は、他者への配慮が自己への配慮に優先しなくてはならない??
 - 君主とは、他者たちに対して権力を行使する
 - そのため彼は原則として、自分と他者たちに対して、誰ともまったく異なった種類の関係を持つことがあり得る。
- マルクス・アウレリウス(古代ローマ皇帝。五賢帝の最後。異民族と戦う。ストア学派に属する哲学者。著『自省録』。(121-180))はどうだったか?
 - 君主の業務の特殊性を際立たせようとしな
 - 他者たち一部下や請願者など一にたいする振る舞いの規則として、君主にもほかのいかなる人にもまったく共通であり得る規則を提示している。

心の底まで『行程』になってしまい、それに染まりきることのないように心せよ。これは実際に起こる現象なのだから。されば、よく気をつけ、おまえを単純素朴にして善良な、汚れなく、謹厳にして虚飾なき、正義を友とし、神を敬い、心に笑みを忘れず、親愛に満ち、おのれの義務に有能な者とせよ。

- ・ ストア派における良心の吟味は、二つの形式、二つの契機を持つ
 - タベの吟味:一日の出来事を取り上げ、為すべきであったことと照らしてこれを判断する
 - 朝の吟味:反対に為すべき務めにたいして準備をおこなう

アウレリウスは、「毎朝目が覚めると、私は自分が何をすることになっているかを思い出す。そして誰もが何かするべきことを持っているということを思い出す。踊り子は…靴屋などの職人も…」

- アウレリウスにとっての支配権、君主の地位は、普通の人間が自らの職務にたいしてとるのと同じ道徳的態度をもって取り扱われ、成し遂げられ、行われなくてはならないものとみなされている。
- アウレリウスの実存の目的は、「皇帝であること」ではなく、自分自身であること。

つぎに、お前の勤めに注意深い眼を注ぎ、その正体を見抜け。そのさい、おまえは善き人間にならねばならぬことと、[人間の]本然の性はなにを求めているかを、合わせ想い起こしつつ、おまえは脇目もふらず、もっとも正しいと思われる仕方、それを実行に移せ。

- ・ 支配権や至上権は特権ではなく(身分の帰結ではない)、職務であり、他と変わらぬ仕事
- ・ この勤めが変わっているのは、人が行いうる仕事、職業のなかで、支配はただ一人の人によってしか行われ得ない
- ・ こうした務めの注意深い検討は、人がつねに覚えているもの<善き人間でなくてはならないということ>、<本然の性が何を求めているかということ>によって指標を定められ、方向づけられなくてはならない。
 - 道徳的に善い人間とは、生涯でひとたびある一つの目的を定めたなら、けっしてそこから逸れることがない、つまり人の行動や無用な知識、彼にとっては重要でないあらゆる世間知に関して右顧左眄することのない人間である、とするイメージが見いだされる…
- 自己への配慮においてこそ、自己による自己に向かう努力としての自己の自己への関係においてこそ、皇帝は自分自身の利益のみならず、他者たちの利益をもなすことになる。

メモ:

勤め:occupation 務め:task

感想

<他者への配慮の必要性からされる自己への配慮>が、<自己への配慮が他者への配慮を包含するもの>と変遷していったようであることはよくわかったし、納得できたように思う。お互いに助け合うことができるような信頼や絆は自分自身を助け、かつその相手のことを助けることにもつながるだろうし、自分が社会の中でどう在るべきかを考えることで適切にふるまうことができるようにも思う。それは皇帝においても同様であった、ということだが、「自分が社会の中でどうあるべきか」は、本当に「本然の性」として意識できるものだろうか。現代的な発想だと、ジェンダーや同調圧力のような観点から批判的に捉えてしまえるようなものであることも確か。ただ、そうであっても、自分が人とともに生きていく過程でどういう役割が与えられ、どう生きるべきかが意識できることは、ともに生きていくことを許し、モチベートするもののようにも感じる。文化的に規定されることを、「抑圧」や「因習」とみなすことは、みずからがみずからで自分の役割を見出していく以外に、社会とかかわることが困難になるのかもしれない。いずれにしても、自己への配慮は必要ということか。

ただ、「善い人間」というイメージは、普遍的に持ちうるようにも感じるが、フーコーの言及は含みがあるようでもあり、続きが気になる。